

Kitami Institute of Technology

北見工業大学

# 学報

平成15年11月 事務局総務課発行 第200号

## 平成15年度秋季大学院入学式



(関連記事 3 ページに掲載)

## 目 次

入 学 式	平成15年度秋季大学院入学式挙行 …………… 3 告辞 …………… 3	3 3
入 試 関 係	平成16年度学生募集要項の公表 …………… 5 平成16年度大学院（第2次）学生募集要項の公表 …………… 5	5 5
研 究 助 成	(財) J F E 21世紀財団2003年度技術研究助成金交付決定 …………… 6 平成15年度民間等との共同研究の受入状況 …………… 6 平成15年度受託研究の受入状況 …………… 7 平成15年度奨学寄附金の受入状況 …………… 7	6 6 7 7
人 事	人事異動、新任者紹介、住所変更等 …………… 8 海外渡航 …………… 9	8 9
受 賞	細矢良雄教授 電子情報通信学会よりフェロー称号を贈呈さる …………… 10	10
寄 稿	米国カリフォルニア大学デービス校滞在記(土木開発工学科 早川 博) …… 11 在外研究員としての1年(機能材料工学科 村田 美樹) …………… 18	11 18
国 際 交 流	2003年外国人学生のための進学説明会に参加して …………… 21 留学生国際シンポジウムを開催 …………… 22	21 22
諸 報	ファカルティ・ディベロップメント講演会を開催 …………… 23 父母懇談会(秋季)を開催 …………… 23 交通安全講習会を開催 …………… 24 国立大学法人化に関する全学説明会 …………… 24 消防訓練を実施 …………… 25	23 23 24 24 25
学 会 等	第19回計測自動制御学会北海道支部シンポジウム開催 …………… 26	26
規 程	北見工業大学学則の一部を改正する学則(北工大達第24号) …………… 27 北見工業大学院規程の一部を改正する規程(北工大達第25号) …………… 27	27 27
日 誌	9月・10月 …………… 28	28

\*住所変更等については、11月6日まで掲載しました。

## = 入学式 =

### 平成15年度秋季大学院入学式挙行

(総務課)

本年度から大学院工学研究科博士課程において、秋季入学を実施しました。このたび、この秋季入学の選抜方法により募集を行い、9月10日に合格者が発表されました。

第一期生として、博士前期課程情報システム工学専攻に范薇<sup>Fan Wei</sup>さん、博士後期課程システム工学専攻にKABIR MOHAMMED HUMAYUNさんが入学し、10月1日(水)午前10時から本学において入学式が挙行されました。

式では学長から告辞があり、その後入学生からそれぞれ抱負が述べられ、引き続き役職員の紹介が行われて、初の秋季大学院入学式を終了しました。

## 告 辞

学長 常 本 秀 幸

It is our great pleasure that Ms. Fan got admission into the Master's Program and Mr. Kabir got admission into the Doctoral Program. We heartily welcome your admission into our university.

In Japan the entrance ceremony was only on April for a long time. But recently the number of students studied in foreign countries is increased. The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology decided to add the autumn entrance examination since 1999. At the early time this system was applied only for the students studied in foreign countries and especially for the international students, and mainly at private universities. But recently many national universities adopted this system to the graduate school for the international students.

Our university also adopted it to the graduate school, but we spread the applicant to not only the international students but also to the Japanese students. This is the first time in our university. So there were only few applicants and it was only the international students.

You are the first students passed the autumn entrance examination. The First one or the No.1 in any cases or events are always wonderful and lucky. For example, your name is announced in this ceremony twice and every person here already memorized your name. In addition professors, officers and of course your supervisor will take extra care of you as the first students.

Today is the special day not only for you but also for us. Perhaps you know that the organization of national universities in Japan changes to cooperation system from next April. This law starts from today. This system change of national university aims to turn in the highest education and researching university in the world. So I can say that you got admission at a very good period. Because professors and staffs in the university will give extra effort to achieve the excellent education and reseach ability. This means, you can learn many things under the active circumstance of oue university.

I think there will be some troubles till you are habituated to the Japanese system and customs. Fortunately the supporting system in our university for the international students will be superior to other universities and the citizen in Kitami is very kind and more hospitable. This is a merit in a small university and local city.

Your first purpose is the absorption of higher education and research in engineering field of our university. Also I would like you to promote the international exchange with our university and this area. So I would like you to communicate with Japanese students, citizen and us, and make many good memories and friendships during your stay in our university.

This is my congratulation message for you. Please do your best.  
Thanks to everybody for joining with us today.



## =入試=

## 平成16年度学生募集要項の公表

(入学主幹)

平成16年度北見工業大学学生募集要項（一般選抜・特別選抜）が10月に公表されました。

要項の内容は、7月に公表された入学者選抜要項の内容を含め、出願手続、個別学力検査

実施日程の詳細、検定料その他入学者選抜上の具体的事項及び留意点を記載し、出願書類等を同封したものです。

## 平成16年度大学院(第2次)学生募集要項の公表

(入学主幹)

平成16年度大学院工学研究科博士課程(第2次)学生募集要項が11月に公表されました。概要は以下のとおりです。

	博士前期課程	博士後期課程
専攻	機械システム工学専攻 電気電子工学専攻 情報システム工学専攻 化学システム工学専攻 機能材料工学専攻 土木開発工学専攻	システム工学専攻 物質工学専攻
選抜の種類	一般選抜 学部3年次を対象とする選抜 社会人特別選抜 外国人留学生特別選抜	一般選抜 社会人選抜 外国人留学生選抜
募集人員	各専攻とも若干人	システム工学専攻 7人 物質工学専攻 5人
出願資格	大学を卒業した者又は平成16年3月までに卒業見込みの者 等	修士の学位を有する者又は平成16年3月までに取得見込みの者 等
出願期間	平成16年1月19日(月)～1月23日(金) (出願資格の事前審査受付 平成15年12月8日(月)～平成15年12月11日(木))	
試験日	学力試験 平成16年2月9日(月) 面接試験 平成16年2月10日(火)	面接試験 平成16年2月9日(月)
合格発表	平成16年2月18日(水)	

## ＝研究助成＝

### (財) JFE 21世紀財団2003年度技術研究助成金交付決定

(総務課)

所 属	職 名	氏 名	研 究 課 題	交付金額
機械システム工学科	教 授	大橋 鉄也	鉄鋼材料の多軸加工による転位蓄積と組織微細化メカニズムの解明	千円 2,000

### 平成15年度民間等との共同研究の受入状況

(総務課)

所 属	職 名	研究代表者	研 究 題 目	民間機関等名
機械システム工学科	教 授	二俣 正美	金属とバルーン化白土との複合機能皮膜の開発	美瑛白土工業(株)
機械システム工学科	教 授	佐々木正史	環境対応ブラインの低温性能研究	シ ョ ー ワ (株)
土木開発工学科	助教授	早川 博	数値計算による河床変動現象の再現性に関する研究	(株)アルファ水工 コンサルタンツ
土木開発工学科	助教授	伊藤 陽司	常呂川流域の地盤性状の評価に関する研究	山上マテック(株)
土木開発工学科	助教授	早川 博	雨水流出抑制機能の評価に関する研究	山上マテック(株)
土木開発工学科	助教授	山下 聡	常呂川流域の地盤浸透能力の評価に関する研究	山上マテック(株)
機械システム工学科	助教授	三木 康臣	アモルファス/多結晶シリコン太陽電池を組み込んだ熱電ハイブリッドソーラーパネルの開発	(株) O M 研 究 所
化学システム工学科	教 授	鈴木 勉	木質系コンポスト残渣の環境資材的機能に関する研究	美幌貨物自動車(株)
地域共同研究センター	助教授	有田 敏彦	ヘンプを原料とする製品開発の可能性についての調査研究	産業クラスター 研究会オホーツク
機能材料工学科	助教授	宇都 正幸	酪農産品の高次加工に関する調査研究	北 見 市
機械システム工学科	助教授	鈴木聡一郎	高齢者用転倒ダメージ軽減システムの基礎的研究	北 見 市
留学生教育相談室	教 授	山岸 喬	タマネギの高度化利用に関する研究	北 見 市
土木開発工学科	助教授	伊藤 陽司	道東都市域の地盤情報データベース構築と地盤構造解析に関する研究	(有)シー・エス・プランニング
機器分析センター	助教授	南 尚嗣	漁業系廃棄物の有効利用及びリサイクル化に関する研究	(有) 明 上
地域共同研究センター	助教授	有田 敏彦	オホーツク圏域における水圏環境保全に関する基礎研究	(株)アルファ水工 コンサルタンツ

平成15年度累計 66件

## 平成15年度受託研究の受入状況

(会 計 課)

所 属	職 名	研究担当者	研究 題 目 及 び 研 究 期 間	委託期間	所要経費 <sup>円</sup>
電気電子工学科	教 授	山城 迪	キャパシタ性能向上手法に関する研究 平成15年8月～平成16年3月	日産ディーゼル工業(株)	630,000
土木開発工学科	助教授	川村 彰	舗装の路面管理基準に関する試験検討業務 平成15年8月～平成16年2月	(財)高速道路調査会	1,979,250
化学システム工学科	教 授 教 授 教務職員	吉田 孝 鈴木 勉 服部 和幸	木タールを中心としたゼロエミッション型産業の創生 平成15年9月～平成16年3月	(社)北見工業技術センター運営協会	6,684,300
化学システム工学科	教 授	小林 正義	蛍光標識骨基質の物性評価 平成15年9月～平成16年1月	(株)ホクドー	1,700,000
化学システム工学科	助教授	山田 哲夫	I.C.P-MS等による水道水の分析 平成15年9月～平成16年10月	(株)環境リサーチ	130,000

平成15年度累計 11件

## 平成15年度奨学寄附金の受入状況

(会 計 課)

所 属	職 名	研 究 者	寄 附 目 的	寄 附 者	寄附金額 <sup>円</sup>
情報システム工学科	教務職員	曾根 宏靖	「海外渡航旅費」に対する助成	(財)電気通信普及財団	270,000
土木開発工学科	教 授	大島 俊之	「学術研究」に対する研究助成	(株)ドーコン	1,000,000
土木開発工学科	教 授	海老江邦雄	「学術研究」に対する研究助成	オルガノ(株)	950,000
	学 長	常本 秀幸	「学生の進路指導・大学説明会等の事業の推進」に対する助成	北見工業大学学生後援会	1,650,000
電気電子工学科	教 授	山城 迪	「分散型電源の電力系統への導入評価に関する研究」に対する研究助成	北海道電力(株)	1,000,000
機械システム工学科	教 授	富士 明良	「工学研究」に対する研究助成	(株)北翔システム	200,000
電気電子工学科	教 授	田村 淳二	「可変速水車発電機および風力発電機の系統連系時総合解析手法の開発」に対する研究助成	北海道電力(株)	1,000,000
電気電子工学科	助教授	菅原 宣義	「配電用がいし類の塩雪害および絶縁特性に関する研究」に対する研究助成	北海道電力(株)総合研究所	1,000,000
機械システム工学科	教 授	大橋 鉄也	「鉄鋼材料の多軸加工による転位蓄積と組織微細化メカニズムの解明」に対する研究助成	(財)J F E 21世紀財団	2,000,000
機械システム工学科	教 授	大橋 鉄也	「耐熱セラミックコーティング材の熱特性予測」に対する研究助成	(株)日立製作所日立研究所	400,000

平成15年度累計 58件

## =人事=

## 人 事 異 動

(総 務 課)

## ○大学発令

発令年月日	現 官 職	氏 名	異 動 内 容
15. 9. 1	総務課付主任	山 下 優 子	機械システム工学科事務室兼務を免ずる
"	総務課付主任	山 下 優 子	総務課総務係主任に配置換する
15. 10. 20	総務課総務係	長谷川 麻 美	育児休業を承認する 育児休業の期間は平成15年10月20日から平成16年8月20日までとする
15. 11. 1	附属図書館学術情報係長	松 尾 博 朋	附属図書館運用係長兼務を免ずる
"	附属図書館学術情報係長	松 尾 博 朋	附属図書館運用係長に配置換する
"	北海道大学農学研究科・ 農学部図書整理掛	平 田 栄 夫	附属図書館学術情報係長に昇任させる

## 新 任 者 紹 介

○附属図書館学術情報係長に ひらた よしお 平田 栄夫 氏

- 昭42. 11. 8生  
 平 2. 4 株式会社東芝府中工場電力計算機システム部  
 4. 11 国際基督教大学図書館非常勤職員  
 9. 4 北海道大学工学部総務課  
 12. 4 " 農学研究科・農学部  
 15. 11 北見工業大学附属図書館学術情報係長





## 海 外 渡 航

(総 務 課)

## ○外国出張

所 属	職 名	氏 名	渡 航 目 的 及 び 渡 航 先 国	期 間
土木開発工学科	助 教 授	川 村 彰	積雪寒冷地土木工学技術に関するセミナー参加及び土木建設関係者との意見交換 (キルギス共和国)	15.9.4 ～15.9.18
機能材料工学科	助 手	張 強 斌	石油大学(北京)にて招待講演及び環境分析に関する資料収集並びに研究打合せ (中華人民共和国)	15.9.14 ～15.9.23
土木開発工学科	教 授	海老江 邦 雄	第2回浮上分離処理に関する国際ワークショップ出席 (大韓民国)	15.9.28 ～15.10.1
未利用エネルギー 研究センター	助 教 授	八久保 晶 弘	オホーツク海のメタンハイドレートに関する共同調査 (ロシア連邦)	15.9.30 ～15.10.16
機器分析センター	助 教 授	南 尚 嗣	オホーツク海のメタンハイドレートに関する共同調査 (ロシア連邦)	15.9.30 ～15.10.16
機能材料工学科	助 手	坂 上 寛 敏	オホーツク海のメタンハイドレートに関する共同調査 (ロシア連邦)	15.9.30 ～15.10.16
土木開発工学科	技 官	百 武 欣 二	オホーツク海のメタンハイドレートに関する共同調査 (ロシア連邦)	15.9.30 ～15.10.16
機能材料工学科	教 授	高 橋 信 夫	留学生に関する事務打合せ (大韓民国)	15.10.6 ～15.10.8
教 務 課	教務係員	工 藤 圭 輔	留学生に関する事務打合せ (大韓民国)	15.10.6 ～15.10.8
土木開発工学科	教 授	海老江 邦 雄	国際水協会のアジア・太平洋地域会議出席及び研究成果報告 (フィリピン共和国、タイ王国)	15.10.12 ～15.10.24
未利用エネルギー 研究センター	教 授	庄 子 仁	極域科学シンポジウム参加及び研究発表 (大韓民国)	15.10.20 ～15.10.24
未利用エネルギー 研究センター	助 教 授	八久保 晶 弘	極域科学シンポジウム参加及び研究発表 (大韓民国)	15.10.20 ～15.10.24
化学システム工学科	教 授	吉 田 孝	漆の植物資源としての持続的循環活用システムに関する研究打合せ及び漆樹液の採取 (中華人民共和国)	15.10.23 ～15.10.28
	学 長	常 本 秀 幸	武漢科技大学開学45周年記念式典出席及び学術・教育交流関係打合せ (中華人民共和国)	15.10.24 ～15.10.27
機能材料工学科	助 手	張 強 斌	武漢科技大学開学45周年記念式典出席及び学術・教育交流関係打合せ (中華人民共和国)	15.10.24 ～15.10.27

所 属	職 名	氏 名	渡 航 目 的 及 び 渡 航 先 国	期 間
総 務 課	課 長	道 谷 博	武漢科技大学開学45周年記念式典出席及び学術・教育交流関係打合せ (中華人民共和国)	15.10.24 ～15.10.27
機械システム工学科	教 授	大 橋 鉄 也	金属材料の強度モデリング及び結晶塑性解析に関する講演及び技術討論 (ドイツ連邦共和国、イギリス連合王国)	15.10.26 ～15.11.4
留学生教育相談室	講 師	菅 野 亨	2003年日本留学フェア出席 (ベトナム社会主義共和国、タイ王国)	15.10.28 ～15.11.3
入 学 主 幹	入学試験係 長	坂 田 寿	2003年日本留学フェア出席 (ベトナム社会主義共和国、タイ王国)	15.10.28 ～15.11.3

## = 受賞 =

### 細矢良雄教授 電子情報通信学会よりフェロー称号を贈呈さる

(電気電子工学科)

電気電子工学科の細矢良雄教授は、本年9月に新潟大学で行われた電子情報通信学会通信ソサイエティ大会において、「無線通信における伝搬特性推定法の研究開発とその国際標準化」の功績により、電子情報通信学会からフェロー称号を贈呈されました。

電子情報通信学会では、工学的・科学的先駆者、学会活動推進者、技術開発指導者、あるいは教育者として、特に貢献が顕著であると認められた会員に対してフェローの称号を贈呈しております。

細矢教授は、各種無線通信システム設計に必要な伝搬特性推定法の開発に永年従事し、その研究成果は我が国の無線通信回線設計に実際に広く利用されております。また、この分野の研究の発展にも努力され、IEEE Antennas and Propagation Society, Tokyo Chapter, Chairmanに選出されたほか、我が国の電波伝搬分野の研究成果を編集委員会委員長としてまとめた「電波伝搬ハンドブック」を出版されました。

さらに、その研究成果を国際的なシステム設計にも応用するため、国際電気通信連合 (ITU) 国際無線通信諮問委員会 (CCIR) に日本代表として1976年から1993年の期間参加し、日本で開発された伝搬特性推定法の ITU-R 勧告としての採択に尽力されました。また1986年から1993年には同委員会の第五研究委員会副議長に選出され、国際的な標準化活動の中心としても活躍されました。現在は、この分野に対する日本からの寄与文書を審議する、総務省情報通信審議会 ITU-R 部会電波伝搬委員会主査として、その取り纏めの責任者をされておられます。また、国際電波科学連合 (URSI) の我が国の対応機関である、日本学術会議電波科学研究連絡委員会の主管幹事 (1995～2003) として、電波伝搬の科学面からの取り纏めにも尽力されました。

これらの、我が国の無線回線設計に実際に使用されている伝搬特性推定法の研究開発および国際標準化への貢献が評価され、今回の称号贈呈に至ったものです。

## = 寄稿 =

## 米国カリフォルニア大学デービス校滞在記

土木開発工学科 早川 博

## 1. はじめに

私は文部科学省在外研究員として、平成14年10月から翌年の8月までの10か月間、アメリカ合衆国カリフォルニア大学デービス校 (University of California at Davis、以下UCDと記す) に滞在しました。本稿ではUCD及びデービス市での生活の一端を報告します。

## 2. デービス市とその近郊の街について

平成14年10月15日に成田を出発し、サンフランシスコ経由でカリフォルニア州の州都サクラメント空港に15日午後1時に到着しました。州都サクラメントはカリフォルニア州中央部の稲作でも有名なサクラメント・バレーと呼ばれる地域のほぼ中央に位置しています。バレーといっても日本の「谷」というイメージにはほど遠い広大な平野で、東西のはるか彼方に谷の両側をなす山並みが霞んで見えるだけです。

空港には受け入れ先のM. L. Kavvas教授の研究室の大学院生である大原憲明君が出迎えにきてくれました。大原君は、数年前に中央大学との網走湖・網走川での共同観測の頃からの知り合いで、事前にアパートを探してもらうなど、UCDに滞在中大変助けられました。空港を一步出て空を見上げると、10月だというのに空一面に眩しい青空が広がり、秋模様の北見からまた夏に逆戻りしたという感じでした。

UCDがあるデービス市は空港から車で約20分ほどのところにあり、サクラメント・バレーを南下するサクラメント川を挟んでサクラメント市の西に隣接する人口7万弱に対して学生が約2万9千人の典型的な学園都市です。サンフランシスコからは州間高速道路80号線に沿って約120kmの内陸にあり、車で1時間半くらいのところでした。初日はとりあえずホテルに落ち着き、これから10か月間を過ごすデービスの第1日目を終えました。

翌朝目を覚ますと、8時過ぎだというのに周りは薄暗く、深い霧に覆われていました。デービスの10月中旬の天気は、日中晴れると気温が30℃近くまで上がり、袖なしTシャツ1枚で過ごすことができましたが、朝晩には霧がかかることが多いようです。カリフォルニア州は夏の間Daylight Saving Time (DST) (日本ではサマータイムと呼ばれています) が導入されている関係で、この時期になると日の出の時間が遅くなり、8時は日の出直後ということになります。サマータイムが終わる11月初めまでは朝がなかなか明るくならず、学生は薄暗い中を通学していました。

カリフォルニア州の西海岸は地中海性気候に属するので、11月から3月頃までが雨期になり、それ以外の期間はほとんど雨が降りません。デービスは内陸にあるため、最低気温は0℃を下回ることはほとんどなく、夏は連日雲一つない快晴が続き、最高気温が40度を越える日も珍しくありません。サンフランシスコは海に面しているので、最高気温はデービスより10度以上も低く、どちらかというところ現地に来る前はサンフランシスコに近い気候と考えていたので、夏のこの暑さには参りました。ただし、北海道と同じく湿度が高くないので救われました。

デービスの街は高い建物がほとんど無く、街路樹などの緑が多く広々として落ち着いた雰囲気です。デービスの第一印象として市内のいたる所に街路樹が多いと感じたのは、生活してみると夏場にこの街路樹の木陰がなければ出歩くことも間々ならないことを切実に実感しました。デービスでは家を新築すると市から庭木が2本贈られるそうで、市としても積極的に緑豊かな街づくりを推進しているようです。

アメリカは車社会だとは聞いていましたが、実際デービスの町には公共交通機関はバスしかなく、学生は大半が自転車かバスで通学してい

ます。バス料金は学生が無料、一般の人でも一律75セントと大変安くなっています。私は10か月間ずっと天候に関係なく自転車で通いましたが、これほど自転車が街中を行き交っている町は米国でも珍しいということです。



自転車専用レーン

その理由は街並みを見てすぐにわかりました。街全体が平坦で坂道はほとんどありません。更に、平屋のおしゃれなストアが建ち並ぶ街の中心部を、日本でいえば四車線分ほどの広々とした車道が通っているのですが、よく見ると歩道寄りの両端に白線で区切ったスペースが「自転車専用レーン」(写真)になっています。この自転車専用レーンはカリフォルニア州に導入されている制度で、自転車は自動車と同じ交通規則が適用されます。車道を区切ったものや一段高くなって歩道に並んだもの、オレンジの線が目印の車道とは離れた単独の専用道もあって形はいろいろですが、とにかく自転車が走行できるスペースがきちんと設けられているので、これなら小さな子供でも安心して走ることができます。中には親子の二人乗り自転車や寝そべて運転するタイプの自転車もよく見かけました。日本なら車の間を縫うように、しかも轢かれないようにと気を遣うところですが、彼らはきっとそんな窮屈な思いはしたことが無いでしょう。優先順位が自動車より高いので、信号機のない交差点ではまず、最優先の歩行者が横断し、次に自転車が通過し終わるまで自動車は交差点に進入できないことがよくあります。それでも、現地の人は辛抱強く待ってくれます。日

本ならクラクションの嵐?に遭遇するのではないのでしょうか。デービスに来てから数ヶ月間は、週末になると緑の中を深呼吸しながらのサイクリング!!が私の日課でした。

そんな街に住んでいても遠くに出かけるには車が無いと非常に不便で、やはり車社会というのは本当でした。街の中心街はとても小さいのですが、その他に大小のモールが点在しているので、普段の買い物には困りません。しかし、週末にビールやワイン、食料品をまとめ買いしようとするに自転車だけでは無理で、やっぱり車を購入してしまいました。デービスのスーパーマーケットにも米や醤油、豆腐などの日本食品を揃えている店はあるのですが、長ねぎやほうれん草などの日本野菜や活きの良い魚は手に入らないので、車を手にしてから隔週でサクラメントの日本食スーパーに通っていました。



UCDの電気自動車の充電スタンド

デービスはまた、環境問題に力を入れている関係で、電気自動車の導入を積極的に促進しています。UCDのキャンパスでも種々のタイプの電気自動車が走っており、写真はUCDキャンパスでみかけた電気補給スタンドで充電している様子です。デービスの郊外には太陽電池の発電プラントもあり、5月の第2日曜日は地球環境保護イベント“Whole Earth Festival”がUCDキャンパスで開かれ、4月の“ピクニックデー”と並んで多くの市民が集まり、環境に対する市民の意識は相当高いものがあります。その一方で、家庭からのゴミはペットボトルや

ビン類、古紙類の分別は行われているものの、それ以外の生ゴミも不燃ゴミも一緒に埋め立てられていると聞いて、ちょっと驚かされました。

娯楽施設はダウンタウンに映画館が1軒、キャンパス内のインフォメーション・ブースやファースト・フード、書店などの福利厚生施設が集まった建物、メモリアルユニオン（通称MU）の地下1階にビリヤード場やボリング場とゲームセンター（デービスで唯一ここだけ）があるくらいで、退屈なつまらない街だと感じている学生も多いようです。しかし、治安は大変よく、主な犯罪は自転車泥棒くらいで、お巡りさんは駐車違反や自転車の無灯火違反の取締りに忙しいようです。アメリカで夜に女性が一人でジョギングをしているのを見て大変驚きました。

最近はこの治安が良いことと教育環境が整っているということもあり、治安の悪い隣町、州都サクラメントから移り住んでくる人が増加しているそうです。デービスの住宅評価額がこの1年で70%も上昇した、との新聞報道もあり、上昇率だけだと全米一だそうです。アパートの家賃も毎年50から100ドルも上昇しているようで、私の入居したアパートは築20年以上も経った1ベッドルームのアパートで月900ドルと、1年前であれば2ベッドルームを借りることのできる値段でした。この住宅不足を解消すべく郊外では新興住宅地やアパートの建設が盛んに行われていますが、デービス市のマスタープランに沿って住宅開発規制区域を設定するなどして、住環境・自然環境の保全に努めているようです。

### 3. カリフォルニア大学デービス校 (UCD)

カリフォルニア大学にはUC Berkeley、UCLAなどを含め現在10のキャンパスがあります。UCDはその愛称AGGIEからも分かるように、もともとは1905年に州立農業学校としてスタートし、1908年にUC Berkeleyの農学部付属農場となり、1922年に農学部、その後獣医学部、文学部、工学部、医学部などが次々とでき、学生数2万9千人（UC中3位）の総合大

学です。16分野(学科)をもつ工学部は、学部学生数ではUC中で最大規模を誇り、キャンパスもUCの中で一番大きく、ただ広大というしかありません。どれくらい大きいかというと、キャンパスの中心部は約800エーカー（約3.2km<sup>2</sup>）、農業研究用地を含めると5,300エーカー（約21km<sup>2</sup>）もあります。東西に6km近い長さであるキャンパスの西側を州間高速道路113号線が横切り、その向こうに農場が広がっています。K. L. Kavvas教授の水理研究所はその一角にあり、自転車や車でないと移動が大変でした。水理研究所のすぐ隣にはセスナなど軽飛行機が発着できる飛行場になっていて、研究所の技術スタッフの中には飛行機を自分で組み立てる輩もいました。

キャンパスを歩き回ると、至る所で写真のエッグヘッドと呼ばれる卵型の彫像を見ることができます。UCDのシンボリックな彫像で、それ以外にも色々な彫像がキャンパスに展示されていました。



エッグヘッド

最新の全米大学ランキングでは農学部が全米トップクラスで、バイオロジー、バイオテクノロジー、環境科学などをはじめとしてほとんどの学部が30位以内に入っています。カリフォルニア州はワインも有名ですが、その基礎を築いたのがUCDでワイン醸造学科の優れた業績として知られています。その関係もあり、ワイン生産地ナパバレーの有名ワイナリーであるロバート・モンダビがUCDに写真にある芸術ホール、モンダビセンターを寄付し、今春オープ

ンしたところですが、UCDは芸術関係のコースも充実していて、私は鑑賞する機会はなかったのですが、著名な芸術家があつまる「UC Davis Presents」シリーズが有名だそうです。また、後から知ったのですが、宇宙物理学者のジェラルドS.ホーキンスの特別講演もあったそうで、残念な思いをしました。



モンダビセンター（芸術ホール）

キャンパスに4つある図書館はいずれも巨大で、それらの総蔵書は280万冊、刊行物は年間4.1万タイトルです。しかも、UCの10キャンパスにある100以上の図書館がネットワークで結ばれており、本を検索して借りることもできます。また、図書館のコンピュータを使って、論文や、記事を検索してダウンロードすることができます。研究で必要になった学位論文を以前はマイクロフィルムから有料コピーしていたのがPDFファイル化され、無料でダウンロードできるサービスは便利でした。図書館はまた、情報処理センターの役割も果たしていて、私が最初に図書館を訪れたのはメールアドレスの申請でした。対応してくれたスタッフは学生で、本の貸出し窓口業務をはじめ、実に多くの学生が働いていました。一番大きいメイン図書館には地下2階、地上3階の5つのフロアーがあり、高速エレベーターで移動します。開館時間は、平日だと朝の7時半から夜中の12時までで、本の貸出し冊数に制限はないようです。また、本だけではなく、館内でのノートパソコン利用のためのインターネット・カードも貸出しています。無線LANは学生が集まるMU周辺がサー

ビス範囲で、まだキャンパスの一部にしか導入されていません。

それから、UCDには新聞局は勿論、KDVSという専用FMラジオ局まであります。ラジオ局は、一定期間ボランティアで働けば深夜の時間に自分の時間が与えられ、自由にDJができるそうです。また大学のケーブルTVチャンネルもあり、市民向けの公開講座や大学の行事案内などを放映しています。また、デービス市とは別にUCD専用の消防署と警察署まであって、UCDと書いたパトカーが常にキャンパスをパトロールしています。デービスは平和なところですが、それでも、キャンパス内のあちこちでパトカーを見かけたり、サイレンも結構頻繁に鳴ったりするので、やはり日本とは違うのだなと改めて感じました。

キャンパスには書店の他にも、コンピュータ・ショップ、自転車修理屋さん、アウトドア・ショップ、旅行代理店、授業の講義ノートを買っている店などがあります。教科書に使う専門書が高いこともあって、MUの書店では中古本の売買を扱っていました。食事ができる建物は2箇所ありますが、本格的な料理を出す食堂はなく、ファースト・フードやサンドイッチ、ベーグルなどの軽食が中心で、日本にもあるピザ、コーヒーのチェーン店やメキシカンファースト・フード店などが入っていました。中でも美味しいクレープ屋さんは人気があり、学生だけでなく年配の先生もクレープを頬張っていました。ちょっと面白いのが、学生証がクレジット・カードのようなものにもなっていて、IDを使って学内で買い物や食事ができてしまうことです。あらかじめ登録した口座から引き落とされるらしいですが、お財布を持ち歩かなくてもいい訳です。

また、キャンパスを歩いていると想像以上にアジア系米国人が多く、UCDの学生構成も最近白人系を抜いてアジア系が多くなっているということです。キャンパス内でも街中でも自分が外国人であるという事を意識することは少なかったように思います。

#### 4. 土木環境工学科 (CEE)

土木環境工学科(CEE)は34名のファカルティ、27名のスタッフからなり、環境系、水資源系、構造系、地盤系と交通・計画系の5研究分野から構成されています。写真の学科棟(Engineering III)は2年前に新設された建物で、一部を応用科学科と共有しています。



土木環境工学科棟

建物内は全て禁煙で、今年の9月以降は屋外も入口から15ヤード以内での喫煙も禁止されるようです。一度、1階ロビー内でタバコの匂いがした、ということだけで全員に禁煙の徹底を喚起するメールが流れてきました。カリフォルニア州では公的な場所は全て禁煙で、レストランももちろん禁煙でした。帰国直後、羽田空港の待合室で喫煙コーナーから漂ってくる紫煙の匂いで、「あー、日本に帰ってきた」と実感してしまいました。また、公的な場所での飲酒も規制されていて、日本の花見のように公園で飲んで騒ぐことはできないそうです。そのため、研究室でのパーティーは、ピザにソフトドリンクが一般的でした。

私がお世話になったL. K. Kavvas教授は地球上の水循環や降雨一流出などの水文循環過程の数学・物理モデルの研究では第一人者で、米国土木学会論文集水文学部門を立ち上げた発足メンバーとして、発刊当初から編集長を努めています。最近では地下水による汚染物質の移流・拡散現象の確率過程に関する研究に取り組んでおり、私の研究テーマも、不圧滞水帯の透水係数や空隙率等の特性量が時・空間的に変動する確

率過程として、地下水位の確率変動を解析的に解くものです。解法として確率過程における伊藤の確率積分などの手法が必要になり、Kavvas教授の大学院の講義やUC BerkleyのA. Chorin教授の特別講義などを受講し、久しぶりに学生時代に戻った気分を味わってきました。

Kavvas教授はトルコ出身の大変な親日家で、これまでも数多くの日本人研究者を受け入れています。現在、研究室には日本人は大原君しかいませんが、中国、韓国、トルコなどアジア系のph.D.学生、ポスドク、スタッフが多く集まっています。一方、米国でも最近では魚類や植生など河川生態系のプロジェクトに予算が重点配分されているようで、生態系のグループとの共同研究を積極的に進めているようです。

また、私が学科事務室で滞り手続きをしていたときに、北海道大学農学部出身の浅野孝名普教授と偶然お会いしました。浅野先生は退職されたばかりですが、2001年に水のノーベル賞といわれるストックホルム水賞を受賞し、学科棟1階ロビーに同賞のトロフィーが飾られています。浅野先生は退職後も大変忙しく、世界各国を飛び回っているため、この後もお会いできたのは3回しかありませんでしたが、今後の研究展望に対する様々な助言を戴き、励まされました。

最後に、10か月を過ごした感想として、毎週のように種々の研究セミナーが企画され、米国のみならず欧州や豪州などからその分野のトップクラスの研究者を招待して、最新の話題を聞くことが出来る環境は羨ましい限りです。IT環境も、学科にはサーバー、ネットワーク、ホームページなどの運営・管理する専任職員が2名おり、種々のトラブルに対応してくれます。学科共有のコンピュータ室があり、大学院生、教職員がPC、プリンターを自由に使うことができます。しかし、居住環境は、本学に比べると教官室は狭いようで、水道の蛇口も洗面所の設備もなく、他学科の教官室も同じく非常に簡素という印象です。冷暖房は建物一体で管理されているので、冷房が効きすぎるときには各自

が上着を着るなどして調節しなければなりませんでした。教育面では各教官室の前にその学期の担当講義時間とオフィス・アワーが掲示されており、これは本学でも直ぐ取り入れることができそうです。オフィス・アワーに学生が廊下で順番待ちをしている姿をよく見かけました。

## 5. 情勢不安の中でのアメリカ生活

昨年10月はイラクの検査問題が混迷している頃で、米・英によるイラク攻撃の話題が囁かれ始めた時期でした。また、日本を出発した日がちょうど北朝鮮に拉致された日本人の一時帰国した日で、何かしらの不安を抱いた出発でした。現地入りしてからはイラク攻撃の話題がマスコミに取り上げられ、マスコミの論調もイラク攻撃のXデーに向けて次第にブッシュ大統領支持一辺倒になっていきました。それに合わせて米国内のセキュリティレベルもNYのテロ事件以後最高のレベルまで引き上げられ、今年のクリスマス休暇は旅行を手控えて家庭でおとなしく、といった風潮が広まり、緊迫した情勢の中で新年を迎えました。

年が明けて早々、家族がデービス市に遊びに来ることになり、まずは無事に到着するまでが心配で、サンフランシスコ空港でみんなの元気な顔を見て一安心しました。偶然、日本で正月を過ごした大原君と帰国便が一緒になり、家族まで世話になってしまいました。家族にサンフランシスコ、デービスを案内し、そして最後はロサンゼルスまで初めての長距離ドライブ、州間高速道路5号線をひたすら南下すること7時間、子供達は後部座席でぐっすり眠りをむさぼり、家内は助手席でナビゲータに徹していました。ロサンゼルスでは情勢不安なアメリカにもかかわらず、多くの日本人観光客が遊びに来ていました。家族もこんな時期に遊びに行くなんて、と両親に心配をかけたみたいですが、日本人に対するロサンゼルス空港の対応を見ていると、言われているよりはセキュリティチェックは緩やかでした。



ロサンゼルス（ドジャース球場にて）

3月20日（日本時間）、もしかすると攻撃を止めるかもしれない、という淡い期待を裏切りイラク攻撃が始まってしまいました。フセイン大統領をピンポイントで狙った最後通告を突きつけた直後の突然の開戦でした。TVは連日生中継でイラクから攻撃の様態を放映していました。それはまるでTVゲームを見ているような感覚で、現実の戦闘シーンがTVドラマの一戦闘シーンのように思えました。開戦直後、米軍内で起きたイスラム系米兵による爆発事故がありましたが、その米兵がUCDの卒業生ということで、デービス市のイスラム教会が全米放映されるなど、ちょっとした話題になっていました。それから先の状況は皆さんもご存知の通り、ブッシュ大統領が終結宣言を出したにもかかわらず、あの泥沼のベトナム戦争の二の舞を演じようとしています。

また、今春中国で発生したSARS、当初は変種のインフルエンザとしか思われていなかったこの新種のウィルスは世界中で猛威を振るい、米国内の被害はそれほどありませんでしたが、UCDも中国をはじめとするアジアの大学との学生交流を取りやめるなど、影響は少なくありませんでした。

## 6. おわりに

不安の中の渡米でしたが、現地では大きなトラブルに巻き込まれることもなく、順調に留学生生活を過ごすことができました。心残りといえば、英会話をもう少しスキルアップしたかった、ということです。毎週、夜にデービス市が開講

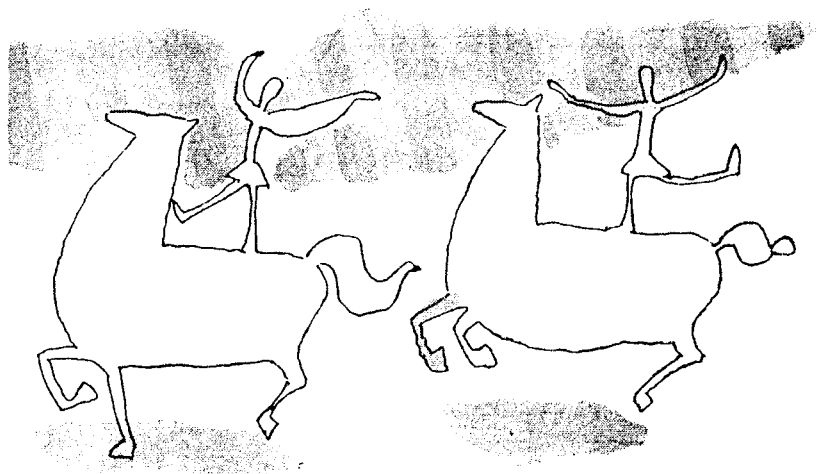


しているAdult SchoolのESL (English as Second Language、受講料は無料)のクラスに通っていましたが。UCDにも同様なプログラムはあるのですが(講師はUCDの先生でした)、アットホームなクラスが気に入り、日本、中国、韓国などのアジア諸国、イタリアやロシアのヨーロッパ非英語圏諸国、メキシコ、ブラジルなどの南米諸国の人たちが集まっていました。多くはUCDの留学生かその家族で、その他にUCDのテクニカル研修プログラムで花や野菜の栽培、ワイン・ビール醸造などを学びに来ている研修生もいました。各学期(クォーター)の最後にはパーティーやピクニックがあり、それぞれの国の民族料理を持ち寄り、ワイワイガヤガヤと楽しいひと時を過ごすことが出来ました。私もいなり寿司を持っていくと、寿司を見慣れた現地の人でもこれがお寿司?と不思議そうな顔つきで頬張っていました。



ESLのピクニック(中央が先生)

最後に、お世話になったL. K. Kavvas教授を始めとするUCD土木環境工学科の皆さま、このような貴重な機会を与えていただきました学長をはじめ、本学教職員の皆さまに心より感謝申し上げます。



## 在外研究員としての1年

機能材料工学科 村田美樹

### はじめに

私は平成14年9月からの約1年間、アメリカ合衆国マサチューセッツ工科大学(Massachusetts Institute of Technology、以下MIT)の化学科において文部科学省在外研究員として研究する機会を得ました。

MITは、アメリカ東海岸の古都ボストンの隣町ケンブリッジに位置しています。ボストンといえば、ボストン茶会事件やボストン虐殺事件など、アメリカ独立の舞台でレンガ造りの建物が目立つ歴史漂う町。滞在中イギリス留学中の友人が遊びにきましたが、ボストンはまるでヨーロッパのようだと言っていたくらい中世の面影を強く残しています。また、ボストンは非常に芸術が盛んで、ボストン美術館や小澤征爾さんが在籍していたボストン交響楽団などを連想する人も多いでしょう。さらに、ボストン周辺には700余りのハイテク企業が存在し、アメリカの最先端と芸術、歴史が共存しています。チャールズ川という大きな川を境に、ボストンの北側がケンブリッジになります。ボストンとケンブリッジ、チャールズ川の対岸に位置するこのエリアは全米屈指の学園都市としても有名で、MITやハーバード大学、ボストン大学、ボストンカレッジ、タフツ大学など60以上の教育機関が集中しています。さらにマサチューセッツ総合病院(MGH)などの全米有数の病院があり、非常にアカデミックな雰囲気があります。

ハーバード大学は、アメリカ独立前に設立された最古の大学で現在も超エリート校として有名ですが、これと隣接してMITがあります。歴史の香り漂うボストン市街地とハーバード大学に囲まれて、MITの建物は非常に現代的に感じますが、創立は1861年、現在のキャンパスに移転したのが1916年ですから、MITも十分長い歴史を有しています。観光地化されてごみごみとした(にぎやかで楽しい?)ハーバード大学

とは対照的に、MITの146エーカーの広大なキャンパスには現代美術の彫像が点在し非常に落ち着いた雰囲気があります(ちょっと寂しい?)。

### ボストンでの生活

アメリカ東海岸の北部に位置するボストンの気候は、一言でいえば夏は蒸し暑く、冬は極寒。

夏は数日、本州並みに暑苦しい日がありましたが、年間を通してほぼ北海道に近い気候です。冬の厳しさはほとんど北見と同じで、特にこの冬は例年以上に寒くチャールズ川が凍っていました。本州からこられた方々は非常に辛そうでしたが(雪だるまを作って楽しまれている御夫婦もいましたが)、私達にとってはいつもの冬という感じでした。

今回、私は妻と二人で滞在しました。大人二人は二部屋のアパートが普通らしいのですが、私達はケンブリッジのはずれの古いワンルームアパートを借りました。家賃がなんと1000ドル。よほど綺麗な部屋かと思うかもしれませんが全くそんなことはなく、1年滞在して私も妻もそれ以下の家賃を見た事はありませんでした。美しい街並みと大学が集中していることから、このエリアの住宅事情は本当に最悪です(家賃が高すぎると、多くの研究室の仲間達がこぼしていました)。アパートからMITの化学科までは地下鉄で駅4つ、徒歩の分を含めても30分足らずでした。ボストン周辺は研究のために滞在している日本人がとても多く、中でもMIT、MGHに通っている人が目立ちます。そのためか数店の日本の食材を扱っている店や、日本の書店など(日本の1.5倍から2倍くらいの価格)がケンブリッジにあります。アメリカの普通のスーパーやドラッグストアもアパートから近かったため、日常の買い物はすべて徒歩で行かれるくらい場所は便利な所でした。

「ボストン産マグロ」を日本でよくみかけるので御存知だと思いますが、ボストンは新鮮な

シーフードが有名でロブスターが普通のスーパーに売っています。しかし、魚を生で食べることはしないので、日本の様に殺菌しておらずスーパーの魚は全て加熱調理しなければなりません。日本食材店でも刺身が売られていますが、私達が知る限り他では唯一イタリア人が経営する魚屋が「サシミックケー」で「チュウトロ」をたまに食べました。他にも韓国食材店の「スキヤキビーフ」など私の口に合うものを妻がいろいろ工夫してくれ、またカリフォルニア米もおいしく、ほとんど日本と変わらない食生活をおくることができました。もちろん本場ですのでクラムチャウダーや、地ビールのサミュエルアダムスを（大きなハンバーガーや甘いドーナツも）大いに楽しんだのは言うまでもありません。

ボストンには野球、バスケットボール、アイスホッケー、アメリカンフットボールの4大プロスポーツのすべてのチームがあります。（この原稿を執筆している10月現在は大リーグの優勝決定戦の真っ最中ですが、ボストンの熱狂的な応援を懐かしく思います。）スポーツ観戦以外にも、オーケストラやポップス、バレエなどの逸品のエンターテイメントがあり、非常に楽しい街だと感じました。



ドームを頂く Maclaurin Buildings (Building 10)の前で

### MITの安全活動

大学の法人化を控え安全衛生管理が最近話題に上ることが多いので、MITでの安全管理について紹介します。MITの安全管理はアメリカの大学のなかでも特に徹底しているらしく、古く

からこの問題に誇りをもって取り組んでいます。実験室の設備はもちろんですが、特に安全に対する教育が非常に印象的でした。

MITでの研究生活は、安全教育からスタートします。まず事務室に教授の秘書を訪ねると1本のビデオとテキストを手渡され、「これを図書館で見るように」と指示され、数時間に及ぶビデオを見ました。内容は実験室内での心得、試薬を取り扱う際の注意、廃液の取り扱い、緊急時の対処などです。ビデオの後には、研究室の安全管理の担当者（ポストクや学生が担当していました。）に研究室内の消火器や試薬をこぼした時にそれを吸収させるもの、廃液瓶に付けなければならないラベルなどを教わり、一緒に白衣、保護眼鏡、ゴム手袋などを買に行きました。この際、常にビデオの内容と対応するように説明してくれます。さらにその後、研究室の担当者と二人で学科のスタッフ（教官です。）のところに行き、私は口頭でビデオの内容と実際に研究室に置いてあるものについて試験を受け、ようやくトレーニングを修了したというサインをもらうことができました。MITでは研究するすべての人に研究を始める前に安全教育を義務づけており、もちろん全員そのルールに従い研究を進めます。その後も、研究室の担当者による自己点検や小テスト（一番近い消火器や火災報知器はどこですか？有機溶媒を10ミリリットルこぼしたときはどうしますか？1リットルこぼしたときは？など）があり、安全管理に対する教育が非常に徹底されているなという印象を受けました。もちろんその内容については理解はしていたつもりでしたが、たぶん大丈夫という思いから日本ではかなりルーズになっており、ゼロではないリスクを管理しなければいけないということを痛感させられました。

### MITでの研究生活

私は、化学科のBuchwald教授のもとで研究を行いました。有機合成化学の研究室で、遷移金属錯体触媒を用いる新規反応の開発やその触媒活性の向上を目指しています。私の日本での

専門分野に非常に近いこと、申請時は丁度エール大学のグループと苛烈な研究競争を繰り広げており、フロンティアランナーと仕事をしたかったこと、またMITという大きな大学に行きたかったことなどから行き先を決めました。

分野が近かったこともあり研究で使用する装置などに戸惑うことは少なかったのですが、共用の核磁気共鳴装置などは、ユーザーとして登録される前に一般的な注意事項を記した数枚のプリントを渡され、それに関して口頭で試験があり、その後はじめてその装置の使用法を教わります。先ほどの安全教育を含め様々なトレーニングが、きちんとシステム化されていることに感心しました。その後は、測定機器の予約等は研究室のパソコンからできるので、共用の機器であっても不便は感じません。

私が滞在している間、化学科のビルは改修工事を行っていました。各階とも少しずつ工事を進め、改修が済んだらその部屋に移り、古い部屋を改修するといった具合です。古い実験室、仮住まいの新しい部屋、そして本来のBuchwald研究室と、数か月おきに引っ越しがあり、私が帰国する9月上旬にようやく全ての改修が終わりました。新しい研究室は、実験室と机のある部屋が完全に分かれており、それらを区切る壁はガラス張り。廊下と実験室の壁も非常に大きなガラス窓があり、中の様子が廊下からわかるようになっています。各部屋の緊急用シャワーや各流し台の洗眼器など、さらに安全対策に配慮された造りになっています。一人当たりのス

ペースは十分確保されており、アルゴンなどの実験用ガスが実験台まで供給されているので非常に実験しやすい環境になっています。

研究室のメンバーはおよそ20名で、その半分がポスドクです。出身はアメリカ、イギリス、カナダなど欧米人が大半で、アジア人は5人ほど。滞在中、日本人は私一人でした。週に一度の検討会はもちろんのこと普段からお互いに助言しあい、皆熱心に研究に打ち込んでおり、大きな刺激になりました。

日本でも大きな大学ではそうだと思いますが、電子ジャーナルがほぼ完備しています。研究を進める際、特に論文をまとめる段階では非常に便利でした。週に一度、廃液回収とガラス器具修理のスタッフが各研究室を廻り、また大抵の消耗品はストックルームで購入できるなど、研究を進める体制が整っていることは非常に羨ましく感じます。

#### おわりに

とにかく初めての海外生活で、いろいろなことが本当に貴重な体験でした。改めて、多くの方々に支えられた1年だったと感謝しています。

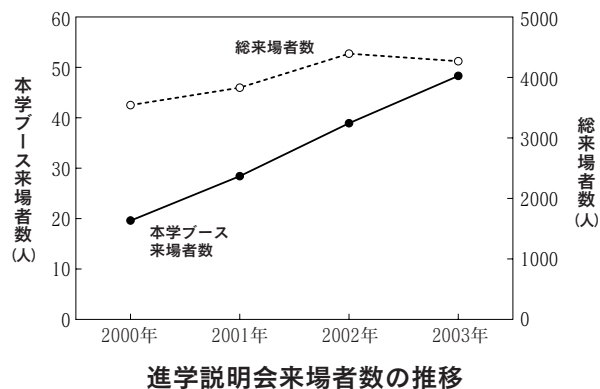
最後に、MITのBuchwald研究室を紹介して下さった北海道大学大学院の宮浦教授、留守中御迷惑をおかけした機能有機材料研究室の増田教授、渡邊助教授、学生諸氏に感謝します。

## = 国際交流 =

### 2003年外国人学生のための進学説明会に参加して

留学生教育相談室講師 菅野 亨

財団法人 日本国際教育協会 (AIEJ) 主催、文部科学省補助事業である2003年外国人学生のための進学説明会 (以後、進学説明会) が、東京の池袋サンシャインワールドインポートマートにおいて、9月7日(日)、午前10時から午後4時まで開催されました。例年と同様本学においてもブースを開設し、入学主幹付入学試験係の二村事務官と留学生教育相談室の菅野が、学生への個別説明・対応にあたりました。参加教育機関数は、189大学・短期大学、その他2機関であり、大学・短大コーナーに加えて、専門学校入学に関する情報を提供するコーナー、学校選択、在留資格、入学試験等の個別相談のコーナー、留学生会コーナー、入学資料コーナーが開設されていました。来場者数は、昨年より150名程度少ない4,367名でありました。この結果は、留学目的の滞在者が110,415名 (法務局入国管理局公表、5月30日付共同通信) となり、1983年に日本政府が打ち出した“留学生10万人計画”を達成した形となっていることから、進学 (留学) 希望者の減少ではなく彼らの間でも我々と同様、インターネット等で情報を得る機会が多いということでしょう。しかし、図のように過去4年間の総来場者数と本学ブースを訪れた学生及び教職員数を示していますが、本学ブースを訪れた学生は48名と、昨年より10名増加し、我々にとってはうれしい悲鳴となりました。



来場した学生のほとんどは、日本語学校に通いながら進学の準備をしている私費留学志望の方々でした。また、機械システム工学科2年の吳曙光さんと、昨年の進学説明会に本学ブースを訪れ、来年度より機能材料工学専攻に入学予定の王麗利さん (東京在住) も通訳として中国人学生と母国語での対応にあたり、ある意味私より貴重なスタッフとして活躍してくれました。(写真)



本学ブースにおける進学希望者への個別説明

本学学部入学には、日本留学試験の日本語、数学 (コース2)、理科 (物理及び化学) を受験することが必要ですが、本学の利点として、上記試験のほかには本学独自の筆記試験、面接試験 (二次試験) がなく、日本留学試験及び健康診断結果の書類選考のみで入学許可が与えられること、すなわち試験のためだけに本学まで来る必要がないことを強調しました。一方進学希望者側からは、教育・研究分野だけでなく、学生生活に関わる、奨学金、授業料免除、宿舎・アパート、アルバイトに関する質問が多かったです。また、今年特に印象に残ったこととして、日本語学校の先生が3名来られ、先生方が言われるには、日本語学校から理工系大学への入学は特に首都圏において近年競争が激しくなっており、地方大学も視野に入れた進学指導を行っているとのことでした。

本学には、日本留学試験（一昨年までは私費外国人留学生統一試験）受験を経て入学した学部学生は、3年生1名、2年生2名、1年生4名と年々増加し、また1年生4名のうち3名は昨年の進学説明会で顔を合わせた学生であり、学生受け入れ数の増加という観点から本学にとってブースを開設する意義は大きいと思われま

す。また、受け入れ数だけでなく、これからも益々増加する本学留学生への学業及び生活支援体制に関しても、本学は独自の奨学金・貸与金制度や国際交流会館の建設等で充実・向上に努めており、留学生教育相談室の一員として、貢献できることを願っております。

## 留学生国際シンポジウムを開催

(教務課)

本学では、9月8日(月)から9月12日(金)まで「アジアの文化の壁」をメインテーマに、日本へ留学後、母国に帰国して活躍している6名の元留学生を中国、マレーシア、バングラデシュ、カンボジアの各国からパネラーに迎え、「留学生国際シンポジウム」を開催しました。

シンポジウムは9月9日(火)・10日(水)の両日、新築されたばかりの本学総合研究棟にて「アジアの文化の壁」及び「お国紹介ー生活・文化」をテーマに行われ、パネラーからは留学生がどのような文化の壁を感じたかという報告、並びに母国の生活・文化の紹介がありました。会場を訪れた北見市民、国際交流団体、北見工業大学関係者等約120名はパネラーの報告に熱心に聞き入り、市民の国際交流への関心の高さがうかがわれました。

また、9月11日(木)には札幌に会場を移し、日本国内で社会人として活躍している元留学生7名もパネラーとして参加して「大学の教官あるいは企業人としての異文化理解・国際交流」をテーマに、留学後の現在の立場から国際交流について意見交換を行いました。



## ＝諸報＝

### ファカルティー・ディベロップメント講演会を開催

(教務課)

去る9月25日(木)及び10月30日(木)に「ファカルティー・ディベロップメント」企画の一環として、教職員を対象に筑波大学教授 大学研究センター長 山本眞一氏及び北海道大学教授 高等教育機能開発総合センター高等教育開発研究部長 小笠原正明氏を招いて「法人化とファカルティー・ディベロップメント(FD)－知識社会

の中での新発展－」(山本氏)、「専門職としての大学教員の訓練と授業開発」(小笠原氏)と題した講演会を開催しました。両講師は、国立大学法人化に向けて今後直面する大学改革や教育改革の重要性について講演しました。

参加した教職員は法人化に向けて認識を新たにしました。



講演する山本眞一氏



講演する小笠原正明氏

### 父母懇談会(秋季)を開催

(教務課)

父母懇談会(秋季)を10月11日(土)本学を会場として、大学院博士後期課程を除く全学生の父母を対象として開催されました。

当日は、遠く四国からの参加者も含め、101組130人の父母が参加し、常本学長から挨拶及び全体説明、学生後援会会長から後援会の現状、高橋副学長から学生の現状に関する説明に続いて、各学科、専攻に分かれて個別面談が行われました。

個別面談では、各学科の教官が対応して修学状況、就職問題等について説明し、父母からは各種の質問が出され、熱心なやりとりが交わされました。



全体説明会において説明する常本学長

## 交通安全講習会を開催

(学 生 課)

本年度の交通安全講習会が、学生及び教職員を対象として10月22日(水)午後3時からC122講義室で開催されました。

講習会では、高橋副学長から最近の本学学生が原因となっている交通事故や駐車・駐輪マナーの悪化の報告があり、出席者に対して交通事故防止と交通ルール・マナーの遵守を改めて強

く要望されました。

その後、北見警察署交通課長から網走管内の事故発生状況や交通安全啓発に関する講演、野付牛自動車学校の指導員によるビデオを用いた安全運転技術に関する指導について、それぞれ詳細な説明があり受講者は交通安全の気持ちを新たにしました。



講演を行う北見警察署交通課長



受講者のみなさん

## 国立大学法人化に関する全学説明会

(総 務 課)

10月23日(木)午後3時からC122講義室において教職員を対象とした3回目の「国立大学法人化に関する全学説明会」を開催しました。

常本学長から、「就業規則」の検討状況、組織形態、事務機構の概要について説明がありました。

次いで柴崎事務局長から、法人化後の事務機構と教職員の方々の理解と協力をお願いしたい旨の話がありました。





## 消防訓練を実施

(会 計 課)

平成15年10月29日(水)午後3時から消防訓練を実施しました。当日は、あいにくの雨天のため、縮小訓練という形で行い、梯子車からの避難訓練及び粉末消火器による消火訓練は中止としました。

今回は、機能材料工学科棟5階の触媒機能材料第4研究室からの出火という想定で、通報・初期消火・避難救助の総合訓練を行い、本学自衛消防隊を中心に、機能材料工学科の教職員・学生が参加し、各班の任務を遂行しました。

自衛消防隊の活動終了後は、北見地区消防組合による屋内消火栓の取扱い説明及び消火器の取扱い説明があり、その後は、屋内消火栓を使つての放水訓練及び消防組合に用意していただきました訓練用の水消火器による消火訓練を行いました。

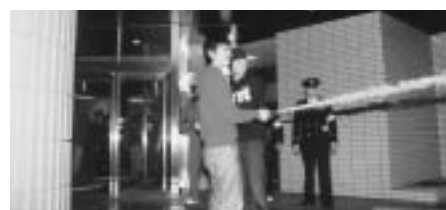
最後に、北見地区消防組合消防本部からは、「管内での火災発生は昨年より19件減少しているが、北見市は道内でも3番目に火災が多い都市なので、大学内ばかりではなく各家庭におかれても火の取扱いに十分留意すること」等の講評があり、本学学長からは、「法人となる来年度からは、火災による被害は全て大学の負担となること、夜間等の職員が不在となる時間帯における実験研究には特に留意する必要がある」ことを訴え、午後3時半過ぎに全ての訓練を無事終了することができました。



▲自衛消防隊による初期消火



▲屋内消火栓の説明



▲消火栓ホースによる消火訓練



▲消火器の説明



▲水消火器による消火訓練

### 住宅防火

いのちを守る3つの習慣

- ①寝たばこは絶対やめる
- ②ストーブは燃えやすいものから離れた位置で使用する
- ③ガスこんろなどのそばを離れるときは必ず火を消す

**忘れるな火事は油断のすきまから  
火を消して明日の笑顔は消さないで**

(北見地区消防組合統一標語)

**その油断火から炎へ災いへ**

(全国統一標語)

**= 学会等 =****第19回計測自動制御学会北海道支部シンポジウム開催**

電気電子工学科 川 村 武

第19回計測自動制御学会北海道支部シンポジウム「デジタル信号処理と数値解析」が9月26日(金)に情報システム工学科棟で開催されました。一般講演は、制御工学およびロボット工学などに関連する講演発表が20件あり、活発な討論が行われました。

また、東京工業大学助教授 井村順一先生に「ハイブリッドシステムのモデリングと制御系設計」と題して特別講演をしていただきました。この講演は、電気電子工学科および電気学会北海道支部の特別講演でもあり、約50名が聴講し

ました。ここでは、ロボットの歩行等の動作切り替えなどに有用なハイブリッド制御の歴史的背景から現在の動向まで理論的な背景を含めたお話を聞くことができました。

当日朝に十勝沖地震がありましたが、交通機関の遅れで講演順番を1件入れ替えた以外はトラブルもなく、無事終わりました。

本シンポジウム開催にあたり、事務局をはじめとして、関係各位にはいろいろとお世話になりました。紙面を借りてお礼申し上げます。



**= 規 程 =****北見工業大学学則の一部を改正する学則**平成15年10月15日  
北工大達第24号

北見工業大学学則（昭和41年4月1日制定）の一部を次のように改正する。

第15条第3号中「外国において、」を「外国において」に改め、同条第6号の次に次の1号を加える。  
七 本学において、個別の入学資格審査により、高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認められた者で、18歳に達したもの

**附 則**

この学則は、平成15年10月15日から施行する。

**改正理由**

「学校教育法施行規則の一部を改正する省令」（平成15年9月19日付け文部科学省令第41号）に基づく所要の改正

**北見工業大学大学院規程の一部を改正する規程**平成15年10月15日  
北工大達第25号

北見工業大学大学院規程（昭和59年北工大達第8号）の一部を次のように改正する。

第15条第1項第7号及び同条第2項第5号を削る。

**附 則**

この規程は、平成15年10月15日から施行する。

**改正理由**

「学校教育法施行規則の一部を改正する省令」（平成15年9月19日付け文部科学省令第41号）に基づく所要の改正

## = 日誌 =

(総務課)

- |      |   |       |   |
|------|---|-------|---|
| 9月3日 | 総務委員会   | 10月1日 | 秋季大学院入学式<br>後期授業開始  |
| 4日   | 人事委員会<br>教務委員会  | 3日    | 地域共同研究センター産学官連携推<br>進員会議  |
| 7日   | 外国人学生のための進学説明会  | 6日    | 地域共同研究センター兼任教官会議  |
| 8日   | 留学生国際シンポジウム(～12日)   | 7日    | 人事委員会   |
| 9日   | 入学者選抜委員会  | 8日    | 総務委員会   |
| 10日  | 第665回教授会<br>第136回研究科委員会<br>大学院博士前期課程・後期課程合格<br>発表                       | 9日    | 教務委員会   |
| 11日  | 第14回大学改革特別委員会<br>地域共同研究センター産学官連携推<br>進員・推進協力員会議                         | 10日   | 第16回大学改革特別委員会   |
| 12日  | 就職担当教官会議<br>地域共同研究センター兼任教官会議  | 11日   | 秋季父母懇談会(北見)<br>地域共同研究センター第11回特別講<br>演会  |
| 18日  | 総合研究棟竣工記念式典   | 14日   | 入学者選抜委員会<br>推薦入学者選抜実施委員会  |
| 22日  | サテライト・ベンチャー・ビジネ<br>ス・ラボラトリーGIS・GPS研究会                                   | 15日   | 第666回教授会<br>第137回研究科委員会   |
| 25日  | ファカルティー・ディベロップメン<br>ト講演会  | 16日   | 附属図書館委員会<br>地域共同研究センター第12回特別講<br>演会<br>北海道地区大学等就職指導担当職員<br>研修会<br>第2回公開講座(～29日) |
| 26日  | 第15回大学改革特別委員会<br>地域共同研究センター第10回特別講<br>演会<br>第19回計測自動制御学会北海道支部<br>シンポジウム | 17日   | 地域共同研究センター第13回特別講<br>演会   |
|      |   | 21日   | 学生委員会   |
|      |   | 22日   | 交通安全講習会   |
|      |   | 23日   | 国立大学法人化に関する全学説明会  |
|      |   | 29日   | 消防訓練  |
|      |   | 30日   | ファカルティー・ディベロップメン<br>ト講演会  |

※この学報は再生紙を使用しています。